

長崎ほいくだより

発行：一般社団法人 長崎県保育協会 長崎市茂里町3番24号 長崎県総合福祉センター 3F TEL.095-846-8871

No. 235
2015.11

発行人 西川 義文
編集人 瀬光 55円
購読料 部

乳幼児の発達に適した保育を

保護者に伝えよう



子どもの教育の重要性

重要性

子どもはその年齢に関わらず等しく尊い存在です。子どもの教育の重要性は対象とする子どもの年齢にかかわらず等しいと考えます。

一方で、個人差がありつつも、子どもはその年齢によつて発達の特性が異なります。よつて、子どもの発達過程に応じた教育内容や方法を駆使することが必要です。

保育に携わっている保育者の専門性は例えば小学校以降の教師の専門性と比較した場合、その教育内容や方法が独自で、多に異なります。多くの保護者に、子どもの発達を踏まえた教育の重要性と保育者の専門性についての理解を促したいものです。もちろん、発達による教育内容や方法に違いがあつても、その重要性は等しいことも同時に保護者に伝えたいものです。

年齢に関わらずその子どもの次世代育成が重要であることは人権の観点からの妥当な考え方であると思います。あるいは乳幼児期の

小学校教育の特徴

教育は、その先の未来が長いことを考えると影響が大きく、後の育ちの礎となる点から、より大切であるといえると思います。

特徴

保育者は乳幼児の発達を踏まえ、個々の子どもの発達に適した保育を行っています。保育は小学校教育と多に異なるものです。

例えば、小学校では授業の最初に子ども達と先生とで「めあて」を確認します。例えば、この45分の授業でどのような「知識」「技術」「情意」「応用、発展」を身に付けるのかをクラス全員が自覚し「めあて」を踏まえて、一緒に学習するのです。小学生特に中学年以降は、一般的に、内容的に考え、抽象的に概念を理解することが発達の目的志向型に机上で一斉に



学習することが可能なのです。小学校学習指導要領には例えば1年生で平仮名、片仮名、漢字80字を習得するといったような、具体的な「めあて」、内容が示されています。

乳幼児教育の特徴

乳幼児は発達の、自己中心性が強く、個人差が大きく、認知的にも視野が狭い傾向があります。よつて保育においては子どもの主体性を尊重することが大切

特徴

しかし一方で、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のなかには「楽しむ」「味わう」「親しむ」といった情意にかかわることが教育の「ねらい」として掲げられています。それは乳幼児期には気持ちの育ちを促すことが大切だということが発達的に分かっているからです。

乳幼児期には教科書は使いません。同じ時間に同じ内容を同じ教材を使って教える方法は、発達の8歳以降が適切だと言われているからです。

2歳児の子どもが良く使う言葉は「ヤダヤダ」「ダメダメ」「自分が自分」などです。乳幼児期は産まれてからの月日が短いので、個人差が大きく、それに配慮した保育がなされね

ばなりません。乳幼児は発達の、自己中心性が強く、個人差が大きく、認知的にも視野が狭い傾向があります。よつて保育においては子どもの主体性を尊重することが大切



です。つまり、保育においては、子ども自身が興味を持ち、実際に見つけてきたモノを調べたり、製作活動の題材にしたりしたいものです。子どもの様子を踏まえて、絵本や歌謡曲を選択したいものです。子どもの疑問を共に解決しようとしたりするなど、子どもにとつて必然性や自明性のある教材や活動を子どもとの相互作用のなかで選択する力量が保育者に期待されます。保育においては、子どもの

好奇心、探求心、憧れを起点とした学びを促すことが発達の適切であるといえます。つまり、乳幼児期には、発達を踏まえ、目的志向型の教科的な教え方をせず、領域、体験や経験を重視します。

保育を

発信する

多くの保護者に、子どもは豊かな遊びや生活を経験し、没頭しながら、知らない間に、知識を習得し、技術を身につけ、情意を育んでいることを伝えたいものです。

発達のには、4歳以降に時系列的に物事を記憶し、再現できるように言われています。もちろん印象深い乳幼児期の記憶を私たちは再現することができ

ますが、一般的には、乳幼児期の記憶は、小学校以降の記憶と比較すると曖昧です。多くの保護者は、そのため「教育」について考えるとき「授業時間」「VS/OR」「休憩時間」「仕事」「VS/OR」「余暇」「勉強」「VS/OR」「遊び」という二項対立的な図式で考えてしまう傾向が強いようです。

乳幼児の最善の利益を保障するために、つまり、発達に適した育ちを保障するためには、そのことを保育者は意識して、乳幼児期の遊びと学びが重要なものであることを積極的に保護者に伝える必要があると思われ



神戸大学大学院人間発達環境学研究所 人間発達専攻准教授

サチコ 北野 幸子

学歴
1993年：神戸大学教育学部幼児教育科卒業
1995年：ミネソタ大学特別研究員
1998年：広島大学大学院教育学部研究科博士課程修了
幼保連携型認定こども園准教授
2001年：博士(教育学)、広島大学論文博士

職歴
広島国際大学、福岡教育大学を経て現職

専門分野
乳幼児教育、保育学、保育領域の専門性

役職等
環太平洋乳幼児教育学会理事(2004～現在)
国際幼児教育学会理事(2009～現在)



2年間、ほぼ毎日履いていた仕事用のシューズ。半年ほど前から傷みが目立ち

始め、そろそろ...とは思ってはいが、愛着あるシューズに代わるこれといったものに出会うことができなかった。そんな折、ついに、新たなシューズを手に入れた。お店の方の話によると、裸足の様な感覚で、人間本来の歩く姿勢を作りやすい構造になっているのだとか。他にもこんなことあんなこと、たくさん説明をして頂いた。このシューズ、機能も素晴らしいがデザインもなかなか。そして何よりも、外は心地よい秋風が吹き、高く澄み渡った秋の青空。そして、もう歩いてみるしかない!一人歩いて歩くよりは、と娘を誘う。(目的地的隣の回転寿司として) いざ、歩いてみてみる。機能のいいこと!...は、わからなかったがそれはきつと素晴らしいはずである。で、歩いてみての発見は今回、娘と2人一緒にだったということ、歩く時間に2人で会話を楽しんだり、寄り道を楽しんだり、その時間をゆつくりと楽しめたということ。普段は車であつという間のところが、歩きなりの時間がなんとともゆつたり。日々の生活で、目的や結果ばかりを優先して何事も早く、早く、急いで、急いで、繰り返してしまふ毎日だが、今回、それはつかりじゃないんだとちょっと反省と、目的までの楽しさを味わう嬉しさを感じられる道りとなった。シューズの機能以上に、歩いてみたことでこんな時間が持てたことが一番の収穫のようでした。「いざ!! 私の○○の秋」

(K・M)